

## 地球科学史資料のアーカイブ化：坪井誠太郎資料調査からの知見より Archiving Historical Materials of Earth Science: A Case of the Research on Seitaro Tsuboi Materials

栃内 文彦<sup>1\*</sup>

TOCHINAI, Fumihiko<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 金沢工業大学

<sup>1</sup> Kanazawa Institute of Technology

社会の科学技術への依存の度合いが増すばかりの今日、科学や技術の営みについて研究することが本質的に重要である。なぜならば、それは「高度科学技術社会を支える基盤（すなわち、科学技術）の『健全性』を評価すること」でもあるからだ。それを歴史的視点から行う学問分野として科学史を捉えることができるが、近現代科学史の研究はこの観点から重要性が高いと言える。

科学史研究を進める上で、資料（史料）の収集・調査が必須なのは言うまでもないが、発表者の経験から、近現代の資料の収集・調査には独特の困難があるように思われる。「歴史になりきっていない」ため、当然ながら資料の体系化がなされておらず、量的には膨大なものの、かえって資料の重要さの見極めが困難である。

発表者は、日本の近現代地質学史の研究を行っているが、地質学者 坪井誠太郎（1893-1986年）は、その日本地質学界に与えた影響の大ききから、主要な研究対象の一つ（一人）である<sup>1)</sup>。誠太郎の父は最初期の日本の人類学者 坪井正五郎（1863-1913年）であり、東京大学大学院情報学環社会情報研究資料センターが「坪井家資料」として膨大な資料を収集し、アーカイブ化している<sup>2)</sup>。坪井誠太郎に関する資料もその中に含まれており、発表者は、2010年に同資料に接する機会を得、2011年より本格的に調査を始め、それまでの研究から得られた知見との対照などを行っている<sup>3)</sup>。

本発表では、上記調査から得られつつある知見などを紹介しつつ、地球科学史資料のアーカイブ化の意義について検討したい。

### 注

<sup>1)</sup>1920年代から1950年代にかけて、東京（帝国）大学地質学教室を率いた。物理学的・化学的手法（溶融実験、偏光顕微鏡を用いた光学分析）を用いた火成岩成因研究などを行った。

<sup>2)</sup>その詳細については、研谷紀夫：「高度アーカイブ化事業と研究者資料のアーカイブズ 坪井正五郎と小野秀雄関係資料を中心に」（『研究者資料のアーカイブズ 知の遺産 その継承に向けて』予稿集』, pp. 51-57, 2011）などを参照。

<sup>3)</sup>その成果については、同センター主催のシンポジウム「研究者資料のアーカイブズ 知の遺産 その継承に向けて」（2011年11月26日）にて発表した（栃内文彦：「近現代の科学史研究における資料のアーカイブ化の意義 坪井誠太郎資料調査から得られた知見より」）。本発表の内容は、その発表をベースとしている。

キーワード: 地質学史, アーカイブ, 坪井誠太郎

Keywords: History of Geology, Archive, Seitaro Tsuboi